はしがき

「そんな働き方があるんですね！」という声を耳にする機会が最近増えている。労働者全員が経営者となる働き方は，まだ広く知られているとはいえないが，少しずつ社会に浸透し始めている。本書は，まさにそうした方々に手に取っていただきたい１冊である。

労働者協同組合は，働く人びとが自ら出資し，経営し，働くという仕組みをもつ。この点において，それは単なる企業形態の１つにとどまらず，資本主義の枠組みに対して，もう１つの自由な働き方や組織作りのあり方を提示する組織といえる。そこにはあらかじめ定められた正解があるわけではない。むしろ，運営のあり方を考えるプロセスそのものに意義がある。

本書では，労働者協同組合について，その基本や制度的枠組みを押さえつつ，多様な視点からの論考を収めた。各章は比較的短いが，40名の執筆者が自身の専門分野から語ることで，異なる角度からの問題提起や実践の知見が集約されている。また，本書では，19名の著名人から寄せられたスペシャル・メッセージを収録している。いずれも，働くことや協同のあり方をめぐる実践や思索が凝縮されたものであり，本編とは異なる角度から，多くの示唆を与えてくれる。その結果として，深くて刺激的な気づきをもたらす構成になった。本書が目指したのは，何か１つの正解を提示することではない。普遍的でありながら時代的でもある問いを開き，読者の中に「やってみたい」「考えてみたい」「話し合ってみたい」といった思いが生まれることにある。

本書は，いわばシェア型書店のような性格をもっている。１つ１つの章が独自の棚のように存在し，それぞれに異なる視点や問題意識がある。それらが並ぶことで，多様な世界が立ち現れてくる。読者それぞれにとって，自分に響く棚との出会いがあればと思う。そして，異なる棚同士がゆるやかにつながり，新たな対話や実践が生まれていくような広がりが本書をきっかけに生まれるならば，これに勝る喜びはない。

なお，本書の制作過程においては，執筆者の方々との対話を通じて，改めて労働者協同組合とは何かを問い直す機会を得ることになった。それは同時に，労働や自治とは何かという根源的な問いに立ち返る時間でもあった。こうした過程そのものもまた，本書の一部を形づくっているといえるかもしれない。

最後に，本書の刊行にあたり，多くの方々から貴重なご協力をいただいた。とりわけスペシャル・メッセージをお寄せくださった皆様に，心より感謝申し上げる。また，本書の企画・編集に際して，多大なご尽力をいただいた法律文化社の皆様，とりわけ梶谷氏にも，前例にとらわれない本書のような企画を支えていただいたことに，この場を借りて深く謝意を表したい。

本書が，読者にとって自らの働き方や生き方を見つめ直し，働くことを主体的に考えるための１つの手がかりとなることを願っている。

2026年８月

編者を代表して　松本典子